東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007 年 1 月 26 日

クルアーンは時代を超越する呼びかけである（アブー・ラハブの例）

クルアーンはあらゆる時代、あらゆる地域において普遍的なメッセージであるということはしばしば述べてきたとおりです。クルアーンは決して歴史に埋もれた、古びた文章ではないのです。クルアーンは、それを信じる全ての信者にとって、古くなることも力を失うこともなく、新しいままなのです。言葉としては一度だけ啓示されましたが、その意味は最後の審判の日まであらゆる瞬間に新たに下されるのです。

時に、クルアーンの一部の章句が今日においてもはや何も導いてはいないとか、もはや何の意味も持たないといった批判や判断を耳にすることがあります。例えば、棕櫚章を読むことがムスリムにとってどのような意味があるのか、どのようなものを読み取ることが出来るのか、と中傷してくるのです。

クルアーンはいつ、どこで生きているかに関わらず、全ての信者にとって彼の生きる時代に即したものです。全ての時代を包括することを語っているのです。人は、その弱さ、長所、能力、可能性といった点で、過去においても現在においても未来においても変わらないのです。クルアーンは人々に呼びかけ、不変の真理を示しているのです。だからクルアーンにおいて触れられている人の性格というものも、時間と空間を越えて変わらぬものです。ナムルード、ファラオ、アブー・ラハブとは、それぞれの時代に存在する悪い性格を示すものなのです、それによってクルアーンは私達に悪の定義を示しています。彼らと対抗していた預言者達を通し、私達に善の定義を示します。

クルアーンにおいて預言者ムハンマドの時代に生きた人々の間でその名が触れられている唯一の敵はアブー・ラハブです。暗示的な意味として、これは「炎を噴出す火の父」を意味しています。クルアーンは全ての信者にアブー・ラハブを悪の最初の例として示しています。それは、それぞれの時代に生きているアブー・ラハブ達を認識できるためなのです。なぜならアブー・ラハブは教えに対し憎悪を、徳に対し不徳を、報酬を求めないことに対し自分の利益への固執を、タウヒードに対し多神崇拝を、正義に対し残虐さを体現する存在であるからです。

なぜクルアーンにおいては、最大の敵としてアブー・ジャヒルではなくアブー・ラハブが取り上げられているのでしょうか。なぜならアブー・ラハブは、アブー・ジャヒルのような真っ当な敵ではなかったからです。自分の性質をはっきりとは示さなかったのです。最大の敵としていた預言者ムハンマドに対し、兄弟のアブー・ターリブの死後になって取引を持ちかけてきたのもこれが理由です。「私が入信したら、私には何が与えられるか。」「叔父よ、皆が与えられているものがあなたにも与えられます。」「私を他の皆と一緒に見なすような宗教はなくなってしまうがいい。」

アブー・ジャフルはバドゥルの戦いに参加し、誤った教えを広める中で命を落としました。しかしアブー・ラハブはお金で雇った兵士を送ったのでした。アブー・ラハブの性質はこのようなものだったのでした。彼のような人々が重きをおくものはたった一つ、自分の利益なのです。クルアーンはこのような性質をそれぞれの時代にも示すことで、アブー・ラハブのような人々は後を絶たない、というメッセージを送っているのです。ちょうど詩人が詠っているように。

「ムハンマドよ、アブー・ラハブはまだ死んでいない
アブー・ジャヒルは大陸を渡り歩いている」

一人のムスリムが棕櫚章から読み取るべきことは、実にたくさんあるのです。